



楊 梓(ヨウ シ) 新連載



今年 3 月からかぎ編みを始めました。最初は小さな丸や星しかできなかったです。それでも、「すごいね」と褒めてくれたことで、どんどん難しいことに挑戦するようになります。やはり子どもでも大人でも褒めることが伸びることにつながるのを改めて実感しました。

自分にとって、とても良いフロー体験ができて、楽しかったです。コロナであまり外出できない今こそ、おすすめします。



アダルトグッズ O L 日記 P285~

土元 哲平 新連載

はじめまして。今号から連載させて頂くこととなりました、土元哲平です。キャリア心理学と文化心理学が専門。学部時代には理学部で人工衛星の研究をしていまし

た。博士論文では、自分のキャリア支援・被支援経験について研究しました。理系から文系へ、右往左往し他者に支えられながらキャリアを歩んできたこと、その中でどんなキャリア支援が重要だったのかを理解したいと思ったからです。このライフストーリーについては、博士論文(近々出版)、今回の連載でも触れています。

私自身、マジシャンとしての活動を 8 年間続けています(マジシャンてっぺ)。京都・大阪を中心に活動し、300 以上ステージ出演をしています。去年はラジオにも出演させていただきました。新型コロナの影響で、ご依頼が少なくなり、場合によってはお断りすることもあり・・・大変ですが、ゆっくりと再開に向けて頑張りたいと思います。ちなみに、演技はこんな感じです。

ステージマジック in 姫路

<https://youtu.be/g9pBdgqbwZY>

趣味はマジック、コーヒーを飲む、レザークラフト、盆栽、文鳥・メダカを育てること・・・など。趣味の世界を知ること、新しいことばに会ったり、身近なものを別の視点で見れるようになることが楽しみで、色々なことに手を伸ばしています。盆栽は最近始めた趣味で、真柏、檜、五葉松を育てています。京都にある盆栽園が、すごく素敵な場所で、店員さんも親切でした。「この枝を伸ばしたいから・・・」などとじっくり考えながら木と向き合っています。普段と違う時間の流れ方を味わい深く感じています。盆栽をはじめ、これまで気にも留めていなかった道ばたの庭木や鉢植えが、生き生きと輝いて見えるようになりました。

ここ数日は、引っ越し作業をしていました。研究の本が多くなり、手狭になってしまったのです。引っ越しは作業員の方に手伝ってもらいましたが、とはいえ骨が折れる作業でした。翌日は全身筋肉痛でした。

facebook もやっていますので、もし私のことについてご関心がおありの方は、お気軽にご連絡ください！

キャリアと文化の心理学 P288~

安發明子 新連載

首都圏で大学時代(2000~)児童自立支援施設で学習ボランティアをしながら全国

各地の児童福祉関連施設や少年院を訪問、その後スイスの施設にも通い、北海道家庭学校とスイスの施設で暮らす子どもたちから見た自分の人生、自分の未来への気持ち、制度が違えば人生も変わるという現実についてルポルタージュ『親なき子』を書きました。

大人の暮らしも知りたくて生活保護の窓口でも働きました。2011 年からはフランスにいます。児童養護施設、親への支援、不登校支援とテーマを決めて数週間から数年かけて現場に通い、フランスの対人援助を学ぼうとしています。

民間団体がメインで活動しているフランス、熱いプロフェッショナルたちがしのぎを削り、エネルギーと希望に満ちた大好きなフィールドです。フランスの対人援助についてここで紹介していけることを楽しみにしています。

フランスのソーシャルワーク P304~

玉村 文 連載第2回

前号から連載させてもらっています。前号が対人援助学マガジンに掲載されてから、そこで事例を取り上げた Y さんとより親密な関係になったように感じています。それは、「あなたのことを書きたいと思う」と伝えたことで、より深く語っていただけたからだと思っています。マガジンを書くことを後押ししていただきました。この調子でマガジン原稿を書き続ければ、そこに登場する人たちから「応援」してもらえるのでは、と期待しています。

応援 母ちゃん！(1) P276~

川畑 隆 連載第2回

もう「かけだ詩⑥」まで書きましたよ。けっこう書けるもので、テーマが思い浮かんだら机の前に貼った「かけだ詩・題材集」にメモしています。

仕事のほうは児童福祉ケースを関係者のみなさんと一緒に検討する機会が少しずつ入ってきていて、頭の中が錆びついていないかなというのが若干心配だったのですが、そんなことはない、わりとよく整理ができてると自分で思えます。そしてそれで元気が湧いて出てきます。

大学の元同僚から「あんたはホンマえ

え時に大学やめたなあ」と言われ、私も「ホンマにそうやで」と思います。オンライン授業の大変さと、まだ動きはとれないでしょうけど公認心理師の実習関係のことなどは、「ご苦労さま」としか言いようがありません。

「かけだ詩⑥」に収めました。家の「洗濯機」が新しくなりました。それと同時に窓をふさいでいた乾燥機もお払い箱になって、そのスペースがいっぺんに明るくなりました。灯りが点いていると思って消そうとするくらいで、そこだけ新築の家に住み始めたようです。さて、コーヒーでも飲んで「かけだ詩⑦」にとりかかりましょうか。木曜日の午前です。

「かけだ詩 ②」

P267～

天川 浩 連載第2回

提出一週間前に自宅のパソコンがクラッシュして初期化するという事態が発生しました。バックアップなどを取らない性分なので今までの全てのダウンロードしたりデータが吹っ飛びました。正直爆笑しかありませんでした。ロールアウト時にインストールされていたソフト以外はすべてが消えていきました。

もちろん 6 月中には出来上がっていた第 2 回の投稿もどこか彼方に飛んで行きました。笑うしかありません。

その代わり、スマホ版のワードをダウンロードしたり、音声認識ツールアプリを使用したりまた新たな便利ツールを手に入れることができました。怪我の功名というものかもしれませんが、そういうことでもない新しいことを始めるということができないことが多いので、大変良い経験をさせていただきました。

皆さんもパソコンのバックアップはとて重要だと思いますので取っておいた方がいいと思いますよ。

ブルーグレーの肖像

P272～

篠原ユキオ 連載第2回

コロナ禍の自粛生活をどう過ごすかがその後の生活にはっきりとしたカタチとなって現われると思ってひたすら作品づくりに没頭してきた。5月に思いついて始め

た100日連続で新作の一コマ漫画を描き続けるという目標はお盆に無事に達成した。世の中はまだまだ手探りの状況が続いているが、焦る事なくどれもプラスに考えて毎日をマイペースで過ごせているのは定年後の独り身の自由な生活のお陰だと思う。(篠原ユキオ)



HITOKOMART

P281～

原田 希

私事ですが、両親ともに早く亡くなったので、私たち姉弟の面倒をみてくれたのは祖母でした。この春までなんでもひとりでやってきた祖母も 97 歳になり、体調を崩し入院。大阪の実家に帰ると、仏壇は花もお供えもなくがらんとして留守のようでした。実家には弟夫婦が居てくれるものの、休めない仕事、コロナ、育児、思いどおりにいかない日々に、ひずみが出始めていて、仏壇まで手が回らなかった様子。仏壇のことも祖母まかせにしている、すまない気持ちになりましたが、生きている人たちの一大事が最優先なのも確か。仏さんは皆、祖母のいる病院へ出掛けていて、そばについていてくれると思うことにしました。そのおかげか、危ない時期を乗り越え間もなく退院できそうです。自宅介護が始まります。今度は私が祖母に恩を返していく時です。

原田牧場 Note

p265～

工藤 芳幸

今号は諸般の事情で「みちくさ言語療法」を休載いたします。申し訳ございません。

私の勤務先の言語聴覚学専攻では新型コロナウイルスの影響で春学期の臨床実習が中止。各地の医療機関で受入れが困難な

状況では致し方ないことでした。この状況の打開策として、臨床実習に代わる学内演習を新たに準備し、実施してきました。前例のないことです。渦中にあった学生たちは残念な思いだったことでしょう。全く同じことは提供できないとしても、臨床的な実践につながり、かつ敢えてこの状況だからこその学びを模索しました。検討の結果、全学生が全ての領域(失語・高次脳、発声発語・嚥下障害、聴覚障害、小児発達障害)で1週間ずつ、ペーパーペシエントやケースの映像を用いたケース検討を実施することになりました。私の領域(発達)では、言語発達検査の実施場面を見せて各自に検討してもらい、毎週のように小グループで Teams を用いたディスカッションをしました。学生がどこまで考えを深めて取り組めるか、リアルタイムの接続が上手くいくか…など、不安要素が多かったのですが、結果的には普段以上に 1 人 1 人の言葉や思考を辿ることができたように思います。果たして学生にとってはどんな体験だったのか、顔を合わせたときに聞いてみたいですが、同業者(ST)にこの話をすると「うらやましい」「いいなあ」という声を複数聞きました。かつて学生だったときに教員とじっくり膝を突き合わせてケース検討できる機会がほとんどなかったそうです。イレギュラーな対応でしたが、通常のスケジュールでは不可能なことに取り組んだ意味は大きかったかも知れません。リアルタイムのオンライン授業は少人数のものに限定されたため、大人数の授業では来る日も来る日も題提出へのコメントや添削、オンデマンド配信の授業も試みました。対面での授業の意味、学生との向き合い方、伝える内容や方法を考えさせられた時間でした。

みちくさ言語療法

休載

高名祐美

5月23日、里帰りしていた次女が無事に男児を出産いたしました。私は陣痛が起きた次女を深夜に病院に連れて行っただけで、コロナ禍で分娩に立ち会うことはできませんでした。次女の夫は、病院での面会も許されませんでした。我が家には

初めての男の孫。日々の成長を楽しんでいましたが、お盆には兵庫県に帰ってきました。当初、夏休みを取ってしばらく兵庫県にいくつもりをしていましたが、これもコロナでかないませんでした。しばらくは会うことが許されません。予定していることが次々と取りやめになる日常です。そうになると、何をやるにもモチベーションが下がってしまいます。こんな時だからこそ、できることもあると思いたいのですが、なかなか意欲向上できない私です。すっかり怠けてしまっています。

1年前に初投稿し今回5回目の投稿となりました。3か月に一度の締め切りが、すぐに来てしまいます。「MSWという仕事」の魅力を、事例を通して伝えたいと思って書いています。実践事例からバーステックを再考したいと思っていますが、なかなか筆がすすみません。今回は、「非審判的態度」について考えてみました。援助期間の長短に関わらず、印象深い事例を振り返っていいと思います。

MSWという仕事 P261～

大石仁美

チャドクガから学ぶ

I 万分の I ミリという小さなウイルスが、衣類を通り越して、容易に侵入するという事を、可視化してくれる事件が起きました。

気が付くと、なんと椿の葉にチャドクガの幼虫がびっしり並んでいるではありませんか。うじゃうじゃと蠢いて、なんともおぞましい。早速、殺虫剤を購入して散布しました。

長袖シャツにマスク、帽子に首巻、手には使い捨てのポリエチレンの手袋といういで立ち。

ところが終わった後、腕に強烈な痒みを生じ、慌てて服を脱いだところ、前腕部が発赤し、熱を持っていたのです。

慌てて患部を石鹸で洗い流し、氷で冷やし、副腎皮質入りのかゆみ止め軟膏を塗布しました。しかし、一日たっても痒みは収まらず、時間を経るごとに次々と新しい発疹が出現しました。前腕から上腕にかけて、さらにわずかながら胸部にも。「抜かった！ 甘く見すぎた!!」

チャドクガは断末魔の苦しみから、毛をまき散らして死んでいったのです。その粒子は、布など簡単に通すのですね。なんと怖ろしい！ 実は、ゴミ袋を使ってコロナウイルス用の防御ガウンを仲間と作っていたのですが、この時もそれを着るべきでした。

ウイルスはもっと小さいのですから、油断すると簡単に感染してしまうということをも身をもって実感した出来事でした。コロナウイルス侮るなかれ！

病児保育奮闘記 P168～

岡田隆介

もともと「聴く」より「喋る」が好きで「書く・描く・読む」は苦手、「精一杯」やつても「ほどほど」のフリをし、「競い合い」を避けて「折り合い」って生きてきた。そしていま、「ステイ・ホーム」ではひとり悦にいつてパワポにふけり、Facebook や Instagram は眺める程度でメールはいつそう短くなった。これは変わらぬ自分の流儀か、それとも老境に入ったのか、興味深く行く末を眺めている。

エア絵本 -ビジュアル系子ども・ 家族の理解と支援(4)- p45～

一宮 茂子

【藤井聡太棋聖(18歳1か月)】

新型コロナウイルス感染症関係の暗いニュースが多い中で、明るいニュースがありました。2020年8月20日に高校生の藤井聡太棋聖(18歳1か月)が木村一基王位と対局し、王位獲得で史上最年少記録二冠を達成したのです。このように記述した私ですが、将棋にかんする詳細はよくわかりません。けれども彼の人間性に深く感銘いたしました。彼は18歳とは思えないほど思慮深く、語彙力が高く、言葉を選んでソフトな口調でインタビューに答えています。その対応を見ていると、謙虚、誠実、爽やかで可愛い若者なのです。背が高く着物姿がよく似合います。対局中の姿は神々しく、普段の姿はおっとりして見えます。このギャップがたまりません。若き天才棋聖はパソコンも自ら組み立てるのだとか。「SHOGI AI」を超える能力があるそうです。福岡で対局した勝負飯は「冷やし能古うどん」、おやつは「マンゴー杏仁プリン」とのこと。私も一度食べてみたいのです。将棋のルールや内容はよくわかりませんが新たな楽しみが増えました。

生体肝移植ドナーをめぐる物語 P241～

松岡 園子

今回は番外編として、私が11歳の時に書いていた日記を紹介しました。

大人になるにつれて、社会に出ていくにつれて、「してはいけない・しなくてはならない」(と思い込んでいた)ことが増えてきます。でも本当にそのことをしてはいけない、また別のあることを本当にしなくてはならないのでしょうか。

子どもの頃に感じた素直な思いや情熱は、この世界に生まれてそれほど年月を経ていない純粋な視点の産物だと感じます。自分の感じたことや常識への疑問を素直に表現し、社会の枠に囚われない発想で自分の世界を形づくっていく。

自由で軽やかに生きる世界がそこにあるような気がします。

統合失調症を患う母とともに 生きる子ども P238～

中條 與子



今号もエッセイを書くことができないと思い、休載させていただくつもりでした。思いがけず書くことができましたので、続きは私のエッセイのページを良かったらご覧ください。どうぞ宜しくお願いいたします。

「盲ろう者」として自分らしく生きる」 p254～

杉江 太郎

児童福祉現場で働く、杉江と言います。突然ですが、半沢直樹が好調のようである。池井戸潤さんの小説はその多くを読了しており、ドラマも見るようにしている。作品は「正義が勝つ」の一言に尽きると思っている。

そしてその作品に触れるたびに、私自身が、金融機関で働いていたこと、そして行内の監査や金融庁の聞き取りを受けたことなど思い出し、金融庁の監査を経験した児童福祉司であることを、なんとなく自慢したくなる。(うらやましくはないか)金融機関で働き、様々な職種を知れたことはこの仕事に多いに役に立っている。このマガジンでも様々な職種の方のナマのお話に触れることが出来る。無知は罪であることを自覚しながら情報を取り入れる毎日である。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P235~

迫 共

今回書かせて頂いた『ひだまり保育園おとな組』にはゲイの保育士が登場します。私は保育園長の職を経て保育者養成校の教員をしていますが、その昔、LGBT 当事者の生きづらさについて調べていたという変わり種。保育現場ではジェンダーやセクシュアリティに関する話題がほとんど通じず、苦労しました。

先日、ネット調査で最初の質問が「あなたの性別(性自認)を教えてください(必須項目)」というものを見ました。時代は変わったものですが、違和感も。

性差でのフィルタリングを「性自認」にするだけで LGBT 配慮だと考えているのであれば、その認識は違うと思います。

「性自認」は個人の内面のことなので、他人から踏み込んで質問されるべきものではないからです。たとえば「生まれ持った性別に適応して社会生活を送っているが、性自認としては違う」という場合など、「答えたくない」と思う人が出ておかしくありません。LGBT に配慮しているように見えて、正反対のことになりかねないのです。

『ひだまり保育園おとな組』では、保育士が子どもたちに性自認を聞く場面がありますが、男女以外の答えも用意しているところがいいなと思いました。男女でのグループ分けが当たり前のようになされる中、違和感を言語化しづらい子どもたちが、居心地を悪くしない配慮がほしいものです。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P231~

朴 希沙(Kisa Paku)

暑い夏もようやく終わりが見え始め、9月を迎えるにあたり色々なことが一気に動き出しています。

まず、個人的なところでは初めての出産を迎えます。さらに同じ月に長年の夢であった在日コリアンのためのカウンセリング & コミュニティセンター(ZAC)のオープンを仲間と共に京都にてスタート。

研究にも進展がみられます。新しいことが目白押しで一気にやってくるので、果たしてやっていけるのか?!という不安はありつつも、これから始まる新しい物語にわくわくしています。

マイクロアグレッションと私たち P227~

浅田 英輔

青森市の中心部では、春以降、気温が上がってくると笛や太鼓の練習の音が聞こえ、7月末から棧敷席が組み上げられるなど、街全体が8月初めのねぶた祭にむかっていく。祭期間中、県庁の人は、即帰るか9時過ぎに帰るかしかなくなる。例年、ねぶた祭りには200万人が訪れるそうだが、今年はない。ねぶた祭に熱心なほうではないけれど、さみしいもんだなあ。

臨床のきれはし P113~

三浦 恵子

コロナ禍の現状下、分断と社会的排除の空気が広がっているのではと感じる場面が少なくないことと、執筆者・読者諸兄も感じておられるのではないのでしょうか。

ただ、こうした状況下においても、より厳しい生活を強いられている人々や弱い立場に置かれている人々の存在を忘れず、気持ちを寄せ、あるいは志を同じくする人々とつながりあってこうした人々を守ろうとする人々の存在に勇気づけられる場面が、業務やボランティア活動でのつながりの中で少なからずありました。社会を支えるのは、そうしたつながりや共感だと再認識している昨今です。

更生保護観官署職員 (認定社会福祉士・認定精神保健福祉士) 現代社会を『関係性』という

観点から考える P221~

関谷 啓子

異常ともいえる今年の暑さだが、コロナによる外出自粛と重なり自ずと家にいる

時間を見直すこととなった。早々と断捨離

した友人あり、保存食作りに精を出した友

人ありで、時間の過ごし方にその人の知

らない面を見せられる心地がした。

友人が2014年から続けているささや

かな読書会のテキスト目録を作ってくれた。

事前に作品を読んで感想を語り合う・・・と言う定形のやり方も面白いのだが、時々

開く「妄想読書会」は新しい発見があり楽しい。なんとなく話は知っているがきちんとは読んでいない作品をテキストにするので自ずと童話が多くなるのだが、今思い

出しても「幸福の王子」(オスカー・ワイルド)

ド)「マッチ売りの少女」(アンデルセン)は

かなり盛り上がった。王子の銅像は何時ごろ建てられたのか?その頃の社会情勢

はどうだったのか?マッチ売りの少女は

雪の中どのような履物を履いていたの

か?彼女はマッチをどのようなルートで入

手したのか?胴元らしき大人が介在した

のか?などなど。作者の生きた時代の妄

想もかなり生き生きと話が盛り上がった。

最後に原文(子供向けに書き直されてい

ないもの)を一人が朗読して、長かった夢

が覚める・・・という趣向である。

「罪と罰を読まない会」という本に出会って真似したのだが、「罪と罰・・・」の参加者の豊富な知識とこちらの雲泥の差

はあるものの、なかなか刺激的な半日はありました。もしよければ、皆さんも試してみませんか。

休載

私の出会った人々

黒田 長宏

マイナンバーカードからの特別定額給付金支給の方法で、私もパスワードをどこに控えておいたかで危ないところだった。役所まで行った人のニュースが流れたが、私は思い出して特別定額給付金までオンラインで通過したため、5月中には通帳にいただいたと思う。国内でもかなり早い方だったのではないかな。

今回の新型コロナの経済政策で一番かつ唯一の成功はこの給付方法だけではないかと思う。しかも最初は一部の従来は経済的に有利になっていた、そしてコロナ騒動が終わればお金は貰える立場の人たちへの支給でやる予定だったのだが、国民の反対で全体支給になったのだった。

その後はまた一部の業界ばかりにおもねたために混乱続きだが、特別定額給付金を繰返せばシンプルなのにと、有識者懇談会には出られる立場ではないので此处に書いておく。

そして、今度はマイナポイントという、多分最大5000円分貰えるような国の対人援助の申し込みをし始めた。

ところが、スマホからすぐに申請できると思ったら、スマホが古くて該当しなくて、そこで詰まった。ネットで調べるとパソコンから『マイキープラットフォーム』というサイトから予約できるらしかった。

そこでも、某前払いカードだとある点で詰まり、某後払いカードでは某暗証番号まで到達するのに少々とまどり、それ以前にカードリーダーがなかなかマイナンバーカードを読み取らず、繰返し抜き差ししたりと1時間くらいかかってしまったか。それでも予約が完了した。

しかし何事も壁が現れるような仕組み

にしてあるのは、なりすまし予防にはいいのかも知れないが、本当は援助したくないからなのではないか。などと陰謀を予想してしまうが、そうではないのだろう。

出来る人はそもそも最新のスマホに乗り換え続けているはずだろう。だがこうした末端ユーザーとしての個人的試行錯誤において、良い道具や装置で簡単に通過してしまう人との違いから何か思考できる大事なことがあるように思う。だが、それが何かはわからないままだ。

これではお年寄りや機械が苦手な人は結局申請は郵送になるだろう。知識を理解できる人とできない人との差が人生の差になってしまう構造が現代だと思わされる。生まれてこの方ずっとそうだったのだけれど。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P202～

山下桂永子

町家合宿を始めてから今年で14年経ち、昨年と今年は諸事情で開催することができませんでした。だからというだけではないのですが、町家合宿 in 京都のお話は前回まででいったんおしまいとさせていただくことにしました。町家合宿自体をやめるつもりではないので、また何かの機会がございましたら、お会いした時にでも話を聞いてやってください。これまでの拙い連載をお読みいただきありがとうございます。団先生から「で、次はどうするんや？」というお言葉をいただき次は新しいテーマで書こうと思っています。

さて最近の話です。扱いが悪いのか、同じものばかり履くせいか、靴は結構履きつぶすタイプです。職場での上履きもしかり。気に入って買っても1年もたないと結構悲しく、だからといって適当に買ってもそれなりに履きなれてくれば、薄汚れて破れていく様はやはり悲しい。試行錯誤の末、行きついた結果がこのような仕様となりました。そう。学校のうわぐつです。この一切の無駄がなく、汚れても破れても味のでるデザイン、指一本で着脱可能、くつべら？いらんそんなもん。場所を選ばず追いかけるも逃げるも瞬時にトップスピードまで持っていける機能性、全てが完璧。

もうこれしかない。履いてみてとてもしっくり。私、教育現場にいるんだなあとしみじみ思いました。

次回からは教育現場の心理職のお話を書かせて頂く予定です。教育系でこんな仕事もあるんだなあとお読みいただければ幸いです。



尾上明代

8月の酷暑の中、近所の道端で蟬の抜け殻がよろよろ歩いている光景が目に残った。思わず二度見すると、それは抜け殻ではなく「中身」が入ったもの—幼虫であった。それまで私は成虫か抜け殻しか見たことがなく、生まれて初めての出会いだったが、そのような姿を(しかも真昼間に)人間にさらすとは、尋常ではない事態なのだったと思った。何年も地中でこのときを待って、やっと出てきたら目が眩むような高温で、一度も鳴くこともなくアスファルトの熱で焼死するか車にひかれてしまうのは気の毒すぎる。近くの木まで送ってあげることにした。直接触る勇気がないので持っていた袋に乗せて、木の根元に行って背伸びしたとき私がぐらついてしまい、落っことしてしまったり、いろいろ格闘して何とかその木につかまらせてあげることができた。

ふらふらしていたところを見ると、きっと喉が渇いているに違いないと、人間的な発想で急いで家に帰って水を持っていき、やっとの思いで木につかまっている幼虫に、水を少しだけかけてみた。「水分とらないと熱中症で死んじゃうから、飲んでね」という気持ちで。すると彼は、天敵でも降ってきたかと思えるような態度(?)で、キャッ！(もちろん声を出したわけではない)と動いて水を避け、一生懸命に一步一步、すべらないように注意しながら木の肌に

足をひっかけひっかけ、ゆっくりと上へ上へと登っていった。もともとあんなに熱いアスファルトでハアハアしていたので心配だったが、見えなくなるところまで到達した様子だったので安心して帰宅した。

彼がめでたく成虫になれたかどうかは、わからない。後日、近所で鳴く蟬の声を、彼(彼女?)だといいなと思いつつ聞き入った。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P87～

松村奈奈子

コロナコロナの毎日。

京都の真ん中で生活しています。2～3年程前から近隣の古いビルが次々と壊されて新しいホテル建築の工事が始まる・・・という光景を目にします。お気に入りのイタリア料理店も古いビルから追い出されてしまいました。コロナ禍で建築が止まるかという、とりあえず完成まではいくようで、近くのコンビニは建築現場のお兄さん達で賑わっています。ホテルは続々と完成していきますが、玄関には「開店延期のお知らせ」が貼られています。夜のお散歩で、料理店のあった場所にできた電灯の灯らないホテルを見ると、いろいろと考えてしまう今日この頃です。

精神科医の思うこと
P174～

鵜野祐介

コロナ禍に酷暑と、今年の夏はたいへんでしたが、それでもツクツクボウシの鳴く声に、心が澄んでいくのを感じる今日この頃です。

うたとかたりの対人援助学
P198～

柳 たかを

子供の頃、僕はせっかちだった。5ミリ角の細長い角材を胴体にし、翼の骨組みの竹ヒゴをロウソクの炎であぶってU字型に曲げる。そうやって主翼・水平尾翼・垂直尾翼を作り、胴体の角材の所定の位置にキリで穴をあけ飛行機の形になるよう各翼の竹ヒゴを組み立てていく。模型飛行機 キットの袋には障子紙に似た薄紙も入っているので障子の木枠に障子紙を貼っていく要領で刷毛で糊を翼の竹ヒ

ゴに塗り、薄紙を破らないよう慎重に貼っていく。公園でゴム動力の模型飛行機が悠然と飛翔するのを見て魅了された。ゴム動力だがプロペラ機なのでは平らな地面があれば滑走して揚力を生み出し、フワリと浮き上がりそのまま離陸上昇し飛行できる。紙で折った折り紙飛行機の飛行とは浮揚感の醍醐味に雲泥の差がある。ただ小さな子供が障子貼りの慎重さとロウソクの炎で竹ヒゴを焦がさないよう微調節して完成させるのは至難のことだった。長兄は、作業を少しずつ積み重ね数日かけてあせらず作品やモノを完成させるのが得意だった。建築士だった次兄も複雑な製図を何日もかけて完成させる根気があった。2人の兄は、ともに模型飛行機作りは得意だった。次兄は自分好みのオリジナル塗装など工夫し遊び心のある機体に仕上げた。一昨年に次兄が逝き(76歳)、今年3月、長兄が腎不全で人工透析が欠かせない身体となった。週に3回病院に通い3～4時間かけて透析を受ける。腕にシャントという動脈と静脈をつなぐ手術を受けた3月、病室に見舞いに行った。マスクをしての短い面会「もう歳やからな」と80歳の兄、「うん、まあジタバタしてもしょうがないか、、、」と私、そんな季節(歳)になったのかと思う。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ
P179～

小林茂

昨年度は、大学教員1年目ということで慌ただしく過ごし、今年度はというところと新型コロナウイルス騒動があり、一カ月遅れで前期の授業が始まりました。それも今まで利用したこともない遠隔授業を大学指定のソフトを駆使して行うようになりました。ようやく前期も終わることになるのですが、ここでも“安定した”“ふつうの”日常と縁がない自分の歩みを実感しております。なかなか鍛えられる思いをしております。

ところで、最近、この『対人援助学マガジン』の自分の活用の仕方を考え直さなといけなと思うことがある。もともとは、支援で感じた雑感を徒然なるままに研究ノートのように残す位置づけであったが、やはりテーマを明確にした方がよいのではないかと考えるようになった。どこかの段階でリニューアルをしようと思う。

対人支援 点描
P170～

中島弘美

対人援助学会の会員には、立命館大学、大学院の関係者の方が多くおられます。

私は、産業社会学部で授業を担当させていただいています。「人間コミュニケーション論」です。受講学生さんは四回生以上の人も多いです。

学生さんたちは卒業後、研修会や勉強会で学びたいと考える人はどれくらいいるでしょうか？学会に関心がある人はどうでしょうか？もしかして、年次大会に参加してみたいと思う人は少しでもいるのでしょうか？

10月からスタートする秋学期の授業で、学部生と学会がどうしたらつながるのか考えながら、案内をしていきたいと思っています！

カウンセリングのお作法
P36～

藤 信子

蝉、特に蝸が鳴くと、夏が行くのに出来ていないことがあるような気分、これまではなっていたけれど、今年は何かに追われる思いもなく、単に「夏が行くなあ・・・」と季節を味わう感じだった。

ただ、8月が終わろうという今になって、毎年長崎に帰っていたのができなかったことが実感され、夏の大事な行事が無くなったので、一夏損したような気もしてきた。

4月以来、こんなに家に籠っていて良いのだろうかとは、あまり思わずに過ごしていた。本当は出かけたくない、ものぐさな性格だったのだと確認していた。それなのに、一夏損したような気分になるのは、やはり夏には何か動きたくなるようにさせるものがあるのかもしれない、と思っている。

集団精神療法について
P42～

団遊

8月12日に母が亡くなった。胃癌だった。コロナ禍のゴールデンウィークに、痛みに耐えきれず病院に行き病気が発覚、そこ

からわずか3カ月で天に召された。

現実を受け止めてはいるが、一方で未だに信じられない気持ちもある。今回短信を書くにあたり、これまで書いてきたものを見返していると、19年の5月、病気が発覚する1年前のゴールウィークには、団家揃って、琵琶湖疎水クルーズをしていた。さらに1年前の18年5月には、父の教授職退官お疲れ様会を、これまた団家揃って催していた。いずれの会においても、母はとても元気だった。

しかし、ドクターによると、少なくとも1年前には癌はそこそこの大きさであっただろうという。あの時、1年後にこんなことになるうとは、思いもしなかった。ただ、不思議に思うこともある。

20年のお正月、実家で母と話した際に、なんとなく聞いておかないといけない気がして、厚労省のガイドラインに沿って、介護や看取りに関するヒアリングをした。その時は、「毎年正月に聞くから、更新していこう」と話したのだが、結局その書面が更新されることはなく、記載された事項が、8月のその時に、少し役に立ったりした。

様態が急変したのは8月11日の夕方なのだが、前々日の9日と、前日の10日、いつものび太のように即寝・グッスリ型の自分が、いつまでも寝付けず、眠れても夜中に何度も目が覚めてしまい、そのことを「歳かなあ」と妻に喋っていた。因果は証明できないが、それでもどこかで「もしかしたら」などと思う。

「こんなことになるのなら……」、大切な人の死に際し、そんな風に思うこともあるのだと思うが、不思議と母に対して、そんな風に思うことはほとんど何もない。母は本当に良くしてくれた。私が幸せでいることが、何よりの親孝行なのだと、心から思わせてくれた。これを母の愛と言わずして、何と言おうか。

**人を育てる会社の社長が、
今考えていること**
P33～

村本邦子

この夏はバルト三国に行こうと企てていたのに、無理になって、珍しく仕事に邁進している。チェルノブイリのミュージアムについてまとめようとしているが、勉強するなかで、いろいろなことを学んでいる。とく

に、ティモシー・スナイダーの『ブラッドランド』（筑摩書房）は衝撃的だ。ブラッドランドとは、ウクライナ、ベラルーシ、ポーランド、バルト三国で、1933年から1945年の間に、ナチスとスターリンによって、1400万人が虐殺されたというのである。一昨年は、ナチスと旧東ドイツ関連の地を巡ったのだけど、旧ソ連下を生き抜いた人々にすごく惹かれるし、もっと知りたいと思う。これまで断片的には映画で見知ってきたような気がするけど、全体像がもうひとつつかめないでいたものが、少しずつ明らかになる感じ。世界はますます狂っていくけれど、そんななかで正気を保つ人々の可能性を見つけない。

周辺からの記憶 —東日本大震災

家族応援プロジェクト(22)
P144～

國友万裕

久しぶりにスポーツクラブで30分ほどウォーキングした。しばらくやっていなかったの、目一杯緩いペースで歩いた。その後お風呂に入った家に帰った。これくらいは平気だと思っていたら、次の日の体が痛いなのって！！

早速マッサージの人に来てもらった。やはり歳なのだ。「30分であつてもいきなりだとしんどいんですよ。15分くらいから始めればいいんですよ」とマッサージの人からは言われた。最低でもあと10年から15年は仕事をしなくてはならないので、体力は保っておかなくてはならない。これから少しずつ体力を取り戻さなくては！と思っている。

思えば、同じようなことばかり連載に書いて、いよいよ10年近くの日々が過ぎようとしている。でも確実に老けてはいるんだなあ！

今一番イライラしているのは、コロナのせいでアメリカ映画の公開や製作が遅れていて、見たい映画がないこと笑。こんなのが悩みなんだから幸せな初老のおじさんです笑笑

男は痛い！
P100～

古川秀明

新型コロナウイルスの影響で令和2年2月以降の講演会&ライブはすべて中止の状態なので、5月に引き続き、今回もいつもの「講演会&ライブな日々」ではありません。いったいいつになれば講演会&ライブな日々が再開されるのでしょうか…。

講演会&ライブな日々
P121～

西川友理

京都西山短期大学で、保育士・幼稚園教諭の養成をしています。それから、支援者に向けた当事者研究会や勉強会を定期的に開催しています。その他社会福祉士養成などにもちよつと携わらせていただいています。

職場の短大は引き続きコロナ対応。出来るだけの感染症対策をとったうえで、実習もスタート。こんな時だというのに、実習先様の多くは、実習生の受け入れをものすごく前向きに考えてくださいます。

保護者の方全員に文書を出して実習生を受け入れる意義を伝えてくださる園。半年以上先の実習について、今のうちから、どのように対応しようかと一緒に計画を立ててくださる施設。

大学のためにお手数かけてすみません、などと遠慮しているヒマはありません。「どうしたらしっかり勉強してもらえるかな」「どうしたらいい先輩を現場に送り出せるかな」と頭を寄せて、うんうんいいながら、実習という教育環境を作り上げている感じ。「大学はこうしますね！」「オッケー、じゃあ園ではこうするね！」「と、意図せず強力な共同体制が整っていきます。まさにピンチはチャンス。これを非常時の気分だけに終わらせずに、継続的な連携に育てることが、ここからの課題です。

福祉系対人援助職養成の現場から
p73～

坂口伊都

コロナ渦中で、なかなか友人とも気軽に会えない中、短大時代の友達からオンラインお茶会のお誘いを受けました。今までは考えもつかなかった事ですが、オンラインだと離れていても気軽に会えます。そ

れこそ 30 年ぶりぐらいに話をしました。短大を卒業した後、社会人入試で大学生になり院に行ったので、短大時代のことを思い出そうとすると、頭の奥の方の記録を手繰り寄せる感じでした。亡くなっている友達もいます。疎遠になっていた友人と、こうして自宅にいながらまた話をする日が来るなんて感慨深いものがあります。

友人の呼びあひ方は、当時のままで旧姓も飛び交っていました。私は、だいたい伊都ちゃんと呼ばれているので苗字が変わっていてもあまり影響がありません。自分では、長い年月で変わったと思っていたのですが、「伊都ちゃん変わらないね」と声を揃えて言われ、そうなんだと意外に感じました。どの辺りが変わらないのでしょうか、私にはピンときていません。でも、こうして皆と再会できるのは、世役がいるから実現できるのですよね。遠く離れた場所に行って、同窓会にも行っていなかった私を忘れずにいてくれて、声をかけてくれる友人に感謝です。

家族と家族幻想

P139～

河岸由里子(臨床心理士)

【心のよりどころ】

コロナの影響で、多くの方が不安に襲われ、ストレスを抱え、不調になっている。相談に訪れる方も増えた。

古来より、疫病が流行ったり、不作や天災が続いたりすると、人々は必ず神や仏にすがった。神社仏閣を建て、精進することでご利益をいただき、今の困難を乗り越えられると思って、手を合わせてきた。人智を超えた問題に対して、人は為す術を持たない。だからと言って無かったことにもできない。信心深いわけではなくても、「困った時の神頼み」で神社に願かけに行ったり、厄除けに行ったりする人は科学が発達した現代でも多い。人の心のよりどころとして、今も神社仏閣がある。

ところが今回のコロナ騒ぎで、多くのお寺さんがその門を閉めた。私の友人に、お寺の和尚さんがいる。彼は、かなり高位の和尚さんだが、このことに対しとても怒っていた。築地本願寺では、法事をオンラインで行っているとテレビでその様子を放映していた。オンラインでの相談は、私の相談室でも行っているの、否定はしない。

しかし、対面であっても、きちんと予防しながら、三蜜を防げば、クラスターが発生する可能性は低い。どんなことも100%はあり得ないのだから、そこまで恐れてお寺の門を閉め、門下さんを締め出すことが本当に必要なのだろうか？

不安に駆られたときは何かよりどころが欲しいものである。それが薬物や、ギャンブルやお酒ではなく、信心である方が、なんぼか健康的ではなからうか。仏像を眺めてお経をあげ、神社で手を叩いてお祈りするくらいのことで、安心できるのであれば、誰もがそれを出来るようにしてあげればと思う。

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P79～

先人の知恵から

P194～

岡崎正明

7月に人生2回目の手術をした。全身麻酔である。命に関わるようなものではないが、それでも万が一のことがないとは誰にも言えない。自分が亡き後のことを考えて少し準備したり、貴重な体験だった。手術はおかげさまで大成功で順調なのだが、それでも術後数日いくつかの管で繋がれていたときは正直しんどく、あつという間に弱音を吐いていた。逃げ出したい、誰かに助けて欲しい…。他人を気安く励ましていた自分が何も分かっていなかったことに気付いた。改めて自分のヘタレぶりを痛感するとともに、次第に回復してくると現金なものでアレコレ余計なことをしたり、エラそうなことを考えたりする。単純というか分かりやすいというか。半分呆れて、半分笑ってしまった。

よく「自分を信じて」「自己肯定感が大事」などというが、私はあまりピンとこない。自分は正直疑わしくてフラフラしてて信用ならない存在なのだ。それでもいじらしいというか、放っておけないというか。どっちかというと、出来の悪い息子を持ったようなというのが、偽らざる感覚だ。

入院をきっかけに出会った人や本があり、結果的に良かったと思う面もあれば、2度としたくないような経験もありで。それもこれも含めて、自分の人生に起こることを今後も面白がっていければと思う。

役場の対人援助論

P107～

大谷多加志

今年の4月から、新型コロナの感染拡大とともに始まった新生活。いまだ、これまでの日常は戻らず、オンライン会議やオンライン研修など、新しい展開もあちこちにみられる中で日々を過ごしています。オンライン授業では、Web カメラの不調により私だけ画面が固まって声も届かなくなるという事態が生じ(PCは無事なので、学生たちの声は聞こえる)、「…先生!?…先生!」「固まってる!」と騒めく学生さんたちを前に、「聞こえてるよ!」「ちょっと待って!」と届くことのない声をあげながら、復旧に四苦八苦するという経験もしました(“突然死した自分を、幽体離脱して見ている自分”を疑似体験しました)。

まだ色々な業務が止まっていて、若干の余裕があるからかもしれませんが、目の前にある仕事をひとつひとつ丁寧に仕上げていこうと心がけている自分に気がつきました。ひとつひとつの仕事と誠実に向き合えるのはとても気持ちがよく、うまくいったこともそうでなかったことも、丁寧に振り返り、気持ちも収めてから次の仕事に向かえています。

コロナによって失われたものがある一方で、否応なく変化が求められた日常の中で新しく体験することも様々あって、その中にはもちろん、プラスのものも多く含まれていました。まだまだコロナの終息が見通せない中、相変わらず不安だらけではありますが、今だからこその自由さを満喫してみようと思っています。

対人援助学と発達検査

P116～

馬渡徳子

七月第一週に、実家が三度目の水害に遭った。前回、家屋をかさ上げしていたので、被害は、庭と果樹園と畑とお墓に留まった。

同じく県外に暮らす弟と、日時を合わせて帰省した。片付けと今後の対応策を講じる目的だった。

このような時期にてと、母が固く訪問を拒んだことから、行政担当者さんとは、オ

ンライン上で懇談し、対応策を助言頂くこととなった。

担当の方が、「他に、何か気掛かりなこととは、ありますか?」と訊ねて下さり、母は「来月は、お盆なので、一番心配なのは、お墓です。あっ、でもそれはあなた方の担当ではないですね。」と応えた。

第二人と顔を合わせて、「私有地の山の中腹にある、母の実家のお墓のことだな」と気づき、それから車で現地に向かった。

現地は、六月から三度続いた大雨で、泥や木くず等で、酷く荒れていた。

皆で、片付けとお参りをした帰り道に母から「ああ。スッキリした。ありがとう。今、ご先祖様にも伝えたいけれど、今回三度目の被害に遭ったことで、思い切って、ケアマネジャーさんから紹介してもらった書式で、エンディングノートを書いた。姉弟皆んな揃っているの、私の意思を確認して欲しい。頼んだよ。」と言われた。

それは、母らしい達筆な毛筆で、丁寧に、何故そのように実行して欲しいのか、その根拠も記載がされていた。

弟たちと、「人生これから、どんなことが待ち受けているかわからないけれど、ここに書かれている母の意向を必ず通そうね」と母に誓った。

馬渡の眼
P177~

団士郎

わが家の緊急事態(2)

前号短信から三ヶ月経った。たいていの人にはことさら数える月日でもない。しかし私には、カウントダウンの刻々と進む日々だった。

GW中の妻の緊急入院から退院後、点滴抗がん剤治療に入って、三週間毎の通院に同行した。時には、診察を受けたところで発熱のため、点滴が延期になり、一日かけて何の治療もなく帰宅する日があった。そんな時は患者のみならず、私にも疲れがどっと出た。

余命一年と厳しいことを言われていたが食欲もあり、体重も復活してきていた。食べられそうなものを見繕って買って帰り、服薬時間に合わせて夕飯をとらせるのが私の日課になっていた。

なんか、大丈夫そうじゃないか、なんて楽観的期待が2人ともにあった気がする。

そんな矢先、3ヶ月目の7月31日夕刻、病気が牙をむいた。

私の帰宅早々、吐血で意識を失って倒れたのだ。大量下血もあった。大慌てで病院の指示を仰ぎ、救急車に初めて同乗した。

ER前の待合室ソファで、喧噪の中で緊急対応を受けるのを待ち、その後、医師の説明を受けた。輸血や手術の承諾書にサインをして、万一も覚悟しておいてくれと言われ、止血のための内視鏡手術に向かうのを見送った。

結果、最悪の事態は回避でき、再度入院になった。だが、今後については在宅看護かホスピスを、本人の希望も含めて話し合っておいてくださいと主治医に言われた。

余命一年と言われて驚いてから僅か三ヶ月である。小康状態の今、毎日病室を覗いて話している(スマホ時代だから簡単に録音だって出来るので8月5日に話し合った声もある)が、今では余命1~2ヶ月と言われている。

次のマガジン43号の発行作業の時、もう妻はいないのかもと思うと、癌という病気の凄まじさに言葉がない。

*

こう書いたとき、まさかこの42号発行を待たずに妻が亡くなるなど思いもしなかった。余命宣告をされていても、意外に長く居られたね、なんて幸運が起きてくれそうな気がしていた。

しかし実際は甘いものではなかった。医師の言う余命一年も、一、二ヶ月も、あと一、二週間かと...のすべてを尻目に駆け抜けて逝ってしまった。8月12日、23時38分、息と鼓動が止まった。

* 印以降の文を書いているのは告別式8月15日の深夜である。12時間ほど前、火葬場で妻のお骨を拾った。こんな事が自分に起きるのかと、分かっていたことだと言えそうなのだけれど、驚きの中で過ごしている。

「Family history」(1)

P52~

鶴谷 主一

約2ヶ月のコロナ休園から園を再開して3ヶ月が経ちました。再開に際しての方針決めから、変更する行事活動の計画など

「再開後」の幼稚園は、感染対策も相まって忙しさは変わりませぬ。

追い打ちをかけるように、「長い長い梅雨」のおかげで室内や、絵本の棚がカビだらけになって大掃除...。終わったと思ったら「猛暑の夏」へと切り替わって、エアコンかけても換気しなくちゃいけないから熱風地獄。マスクが苦しい中で熱中症にも神経をとがらせなければならず、コロナ禍の保育は保育者にとってなかなか過酷です。

頑張っているみんなに何か楽しいことをしたいなあ、と思っていましたが1学期末の打ち上げ飲み会も自粛して全員でワイワイ会食することもできません。それで係の職員が「広いホールでゲームしましょう!」という提案でソーシャルディスタンスを保って、景品争奪ゲームをやることができました。伝言ゲームやジェスチャーゲームなど、みんなで遊んで気分転換もできました。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から
P65~

水野スウ

エアコンなしで比較的涼しい造りのわが家ですが、この夏の酷暑はさすがに厳しい。ヒグラシが鳴いて、鈴虫が鳴いて、夕暮れの風がはいってきて、やっとう〜っと深呼吸。ちかごろ呼吸が浅いのは、かならずしもマスクのせいだけじゃなかったか。もちろん家でマスクはしないけど、熱をもった空気を深く吸い込むのにからだは抵抗するんでしょう、つい浅い息になっている自分に気づきます。今号は、コロナ下の紅茶の時間のことと、生とりモートに関してのレポート。パソコンに向かう時は極力、意識して深呼吸してから書きだすようにしていました。

直近のうれしかったできごと。栃木県のある市の子ども・子育て総合センターあて、1000冊の「ほめ言葉のシャワー」を送りました。来春、その市の小学校に入学するお子さんが1000人。秋の就学時健診の際に一冊ずつプレゼントするのだそうです。

行政にこんな粹なこと思いつく方がいるなんて！びっくりすると同時に感動しました。

この冊子をつくってからもう12年たちます。「ほめ言葉のシャワー」の数年間のワークショップで、参加した方たちが書いてくださった言葉を、あずかったのは私。こんなかたちにデザイン、構成、編集したのは娘。文章を書いたのはほぼ私だけど、それに娘がいちいち、あーだこーだ、こーだあーだと、なんとも注文の多い編集者。親子初の協働作業による本づくりは、それまでほんとに知らなかったお互いを発見しあうことの連続で、違いを認めてリスペクトすることの練習でした。その過程とその時の経験は、今でも私たち親子のたからものです。

そんなたからものの本を、新一年生とその保護者さんが受けとってくれることの、しあわせ。ありがとうのきもちをぎゅっとこめて、行ってらっしゃーい！と本たちを送り出しました。写真は、旅立ちを待ってスタンバイしている、1000冊の「ほめ言葉のシャワー」。



きもちは言葉をさがしている
P92～

荒木晃子

奈良県北葛城郡に転居して11ヶ月。部屋を見回せば、まだ段ボール箱が其処此処に残っている。中身は、豊中のマンションから持ってきた食器、美術品など日常に必要としないものばかりである。

生前、両親が暮らした戸建てには、転居前から生活必需品が全て揃っていて、私にとってはその全てが思い出の品。茶碗を手取るたび、壁に掛かった絵画を見上げるたび、懐かしさと安堵感を覚える。

本来、私がいるべきところへ戻ってきた時間と空間を確信し今日の安らぎにつな

がっているのだと感じる。忙しい日常でも、時折アルバムを広げ、幼い頃の私を抱いた父・母を眺めてみることを忘れない。写真の中の(まだ30台代であろう)父と、若く美しい母が、幼い私に向けるまなざしに、今も包まれているようで心地よい。こんなに愛されていたのだとの思いが、冷えきった私のからだところを暖める。このぬくもりがあるからこそ、今、このときに何があるかと生き抜いてみせるぞと思えるのが不思議だ。

生殖医療と家族援助 P84～

中村 周平

実は、回復しつつあった首の調子をまた崩してしまいました。前回、お休みさせて頂き、次回に納得した文章をと意気込んで始めたものの、原稿の作成に十分な時間を充てることが出来ませんでした。

連続のお休みで本当に申し訳ないのですが、今回もお休みさせていただきます。

*

6月ごろに父親から突然、「屋頃から微熱がある」との連絡を受けました。普段はあまり顔を合わせていなかったのですが、偶然2日前に身の回りのことを手伝ってもらったため短い時間ではありましたが、同じ空間に滞在していました。

時期が時期だっただけに、私のサポートをしてくださっているヘルパー事業所から、父親の体調の変化や、顔を合わせた時間、そこに居合わせた人間など様々な質問を受けることになりました。

呼吸に疾患を持たれている方にもサポートを行われている事業所ですので、私や父親から感染していた場合、大惨事になります。そのため、何度も質問を受けることは当たり前のことだと思います。

ただ同時に、何も悪いことをしたわけではないのに、悪いことをしてしまったという感覚も感じずにはいられませんでした。感染対策、そして感染しないことはもちろん重要なことですが、そのうえで罹ってしまった場合は、誰の責任でもないのではないか。そのことを一言でも相手に伝えることが大切であるということを強く感じさせてくれる出来事でした。ちなみに、父親は感染していませんでした。

ノーサイド

山口洋典

この3ヶ月、週5コマ、学期を横断する実習型のサービスラーニング科目で時間割に固定されていない土日を中心にした変則開講1クラス、それぞれの授業運営にてんてこまいでした。最初は学生の通信環境が定まらないだろうということで授業管理システム(CMS、立命館大学では朝日ネットのmanabaを使用)で文字を中心にした解説と課題の提示で、その後は通信容量を圧迫しない音声ファイルによるラジオ講座方式に、そして5月中旬以降はZoomを用いたライブ授業とその内容をアーカイブしたオンデマンド学習へ、という具合に受講規模や到達目標などを加味して工夫を重ねました。これに加えて非常勤先での大学院のクラスでは、当初はLINEで、その後はZoomで対話を重ねることにしました。



(写真、8月26日13:55の立命館大学
大阪いばらきキャンパスの風景)

そして8月下旬、学期を横断するサービスラーニング科目の中間ふりかえりを、対面とオンラインとの併用で行ったのですが、これがなかなか大変であることを身をもって実感しました。特に苦労したのは、対面授業を行っている教室の内容、中でもグループワークでの議論をどのようにオンライン参加者と共有するか、でした。ハンドマイクの使い回しで新型コロナウイルスへの感染リスクが高まる、といったことなどを鑑みると、圧倒的にパーソナルな環境で受講できるZoom参加者に安心感が高いということ、その一方で対面での参加者には身振りやしぐさや表情や間合いなどのノンバーバルなコミュニケーションによって、一体感や連帯感が高まったようで、対面とオンライン、この2つの空間をどのようにして混交できるか、新たな思考と試行と実践が求められそうです。

PBLの風と土 P206～

見野 大介

工房に導入する予定がなかったアレクサが、とある縁で工房に来ました。親以上に息子がハマリ、毎日保育園の行き帰りの際にアレクサへ挨拶をしたり、仮面ライダーやキラメイジャーの歌を流して踊ったりしてます。こんな育児で良いんだか、良くないんだか(笑)

ハチドリ器 P4

千葉晃央

コロナ対策をして、満蒙開拓平和記念館に行きました。朝10時には到着。館のある長野県は開拓団への参加人数も、満州義勇軍への少年兵の参加？もずば抜けて多い。2位にダブルスコアになるぐらいの数字が残っている。背景に自治体が奨励し、なおかつ「この地域から何人出すように」とノルマ主義で進めた過去がある。冬は雪深く、山が連なる地形はその苦勞が多かったことも実感。記念館は、当事者の語りを動画として、文章としてふんだんに用意して来館者を迎えていました。当事者からの発信の重要性はどの分野も共通。昨年訪れた戦没画学生慰霊美術館「無言館」も長野県。こうした後世に伝える活動が活発なのも、その特徴。今回の旅友の長女も退館時に感想を書き掲示するスタイルに乗っかって、壁に掲示。「情報操作、住民の分断、貧困。これが再び整いつつあります。2度と繰り返さない」と私も書いた。

そして、これも行ききたかった「杉浦千畝記念館」へ。隣の岐阜県。こちらも山深く、そして古い学校もあり、川も印象的。展示は千畝が書いた通行許可を得られたユダヤ人のその後と、得られなかったユダヤ人のその後の出来事が並列で展示。生い立ちを見ても、後の行動の萌芽ともいえる岐路での選択が見て取れる。マイノリティの選択ができるという事実は、その次の選択可能性を広げることも実感。戦後、外務省から解雇され、それどころかその存在すら隠蔽された事実にも閉口。千畝さんのことは学校で私は習わなかったけど、今の子どもたちは学校でも触れると娘にきく。いいことだ！帰宅は18時というシンプル

行程で、日帰り完了。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

援助職の未来

P17~

脇野 千恵

コロナ禍とはいえ、季節や自然は、普通に私たちの生活の中を通り過ぎていきます。気がつけば夏の終わりに近づき、裏の田んぼの稲穂も垂れ始めました。夜は虫の音も。

日々の生活は、不登校生の支援員として関わり、時々、元同僚が経営する塾の応援に行っています。長い休校の影響か、塾は流行っているようです。来年は少し働き方を変え、自分のしたかったことを優先させようと思います。

さて、「性と生」の情報発信と交流の場として「まちの保健室ちむちむ」を立ち上げて2か月。コロナ禍の中だからこそ、人と人とが集う場所も大切にしなければと思っています。

若者向けにと慣れないツイッターも始めました。すぐには、若者は来ないだろうけれど、続けることが大事。将来的に若者同士が悩みなどを共有し合い、ピアな関係になっていく場所になればいいと考えています。



こころ日記「ぼちぼち」part II

P258~

竹中 尚文

私が寺院住職であることはご存じかと思う。浄土真宗の住職の妻を坊守(ぼうもり)という。浄土真宗は開祖の親鸞聖人が結婚をしたというので、住職が結婚をする場合が多い。そして住職と坊守がお寺の要職とされる。◆この夏もそうであったが、とてつもなく忙しい時にお葬式ができる。坊守は「あとは任して」といって私を送り出す。彼女が日程を調整して、私がお参りをする予定になっていたお宅へお参りに行く。お参り先である門徒さんのお宅では、住職がお参りをするより歓迎されているようでもある。◆彼女はお寺の生まれでもなく、仏教の勉強をしたわけでもない。私と結婚したのが機会に僧侶になったのである。僧侶になるための基本的知識は、たぶん私から得たものが多いように思う。儀式についての作法なども私からの知識が多いかもしれない。それに、彼女が僧侶になるためにずいぶんの多くのお坊さんが力をかけてくれ、知恵を授けてくれた。今では、私が彼女から教わることも多いし、相談相手でもある。何より、仏さまとの間合いがいい。私など、意識をしてもっと近づかねばと思ったりする。◆彼女との出会いは思いも掛けないものであった。私には離婚歴がある。結婚に関して、苦しい思いがほとんどである。二度と結婚などするまいと思っていた頃に出会った。そこから結婚を決意するまでは、かなり大きな迷いと決心があった。あの時、私の生涯を懸けてもいいと思った。それを黙って見守ってくれたのが団士郎さんと団典子さんであった。それが何よりも大きな応援であった。この夏、その恩人である団典子さんが亡くなった。心より合掌

『盆踊り漫遊』

P98~

中村正

コロナ禍で大学はまだ厳しい管理下にあり、秋学期も講義系科目はオンラインで実施することになる。対面式の場合もコロナ対策が前提なので密を避けることが要請される。マスクをして話をするのは大変だ。孤立しているので、動き回りたい元気な学生たちはメンタルヘルスが悪化しているようだ。Zoomでオンライン授業する際

にパワポを提示するが良かれと思って文字列に色をつけると色覚過敏な学生がいて白黒にして欲しいと言われる。BGMを入れると音楽だけが大きく聞こえてしまう聴覚過敏な学生もいる。Zoomの向こうにはいろんな学生たちがいる。パソコンのカメラの向こうには多様性の海が横たわっていることを理解する。それは世界に開かれていることへ想像力がある。こうして大学と「夜の街」はなお厳しい状況が続く。こうしたなか、対人援助学会の年次大会をどうするのかも悩ましい。オンラインでの開催となる予定だ。全体企画はコロナ禍での対人援助というテーマになりそうだ。社会的なつながりの再構成をしつつ対人援助の現場からの知恵の交流をしてみたいと思う。こうした時代にふさわしい話題での企画を計画することにした。オンライン面談、ソーシャルコネクション、シェアリングエコノミー、Stay Home できない人のサードプレイスや居場所等がキーワードとして浮上する。対人援助学にできることはたくさんありそうだ

臨床社会学の方法 P21～

乾 明紀

42号も休載とさせていただきます。
8月は成績評価と科研費研究などで手が回りませんでした。2019年も8月(9月15日発行分)は投稿できませんでしたが、この時期は書ける心身になりにくいようです。
私は、いわゆる“対人援助職”ではないので、ある意味場違いなことを周旋家日記という表題でエクスキューズしながら、その場その場で書けることを書いてきたのですが、そろそろこのやり方を見なした方がよいかもしれませんね。

周旋家日記 休載

寺田 弘志

今回は締め切りに2日遅れてしまいました。編集部の皆様、ご迷惑をおかけして済みません。
暑いですね。
新型コロナも怖いですが、温暖化で年々巨大化する台風が怖いです。

残暑お見舞い申し上げます。皆様、どうぞご無事で！

接骨院に心理学を入れてみた P212～

浦田 雅夫

滋賀長浜の武田倫江さんのお話をうかがった。私の親と同じ世代。絵を描くのが好きだったという武田さん。忠君、聖戦。戦意高揚。それを信じて疑わなかった子ども時代に書いた絵について語っていただいた。「戦争を知らない子どもたち」だった私が、「戦争を知らない子どもたち」という歌も知らない子どもたちと武田さんの絵について語り合いたい。

社会的養護の新展開 P63～

小池英梨子

えっ！？もう前回のマガジン発行から3ヵ月も経つの？！って毎回思ってしまう。



そうだ、猫に聞いてみよう P188～